

早稲田大学科学技術ジャーナリスト養成プログラム MAJESTy 設立 10 年記念シンポジウム 「科学技術ジャーナリズム これまでの 10 年これからの 10 年」開催のお知らせ

2005 年に早稲田大学政治学研究科に「科学技術ジャーナリスト養成プログラム（略称：MAJESTy）」が設立され 10 年が経ちます。MAJESTy は、予定された 5 年間で滞りなく終え、科学技術に限定しないジャーナリスト養成コースに発展的解消し、現在は日本最大のジャーナリスト養成大学院になっています。

この 10 年間には東日本大震災と原発事故、STAP 細胞問題など科学技術の信頼性を失わせる出来事が多数ありました。そのような事態を前にして、MAJESTy の卒業生、さらには日本の科学技術ジャーナリズムどのように対応したのでしょうか。設立 10 年を記念した本シンポジウムでは OBOG からの活動報告とともに、現役の記者や科学コミュニケーションの専門家によるディスカッションを通して、「科学技術ジャーナリズム これまでの 10 年これからの 10 年」を考えます。

会場からのご意見も募る予定です。多くの方にご来場いただけたら幸いです。

★入場無料 事前申し込み不要

■日時 2015 年 9 月 26 日 13:00~16:30 (12:30 開場)

■場所 早稲田大学小野梓記念講堂（早稲田大学早稲田キャンパス正門近く）

<http://www.wasedabunka.jp/about/access>

最寄り駅：早稲田駅（東京メトロ東西線・都電荒川線）

■問い合わせ先 m-sympo@list.waseda.jp（事務局）

■主催 早稲田大学政治学研究科/J-School・MAJESTy 同窓会

■プログラム

第 1 部 MAJESTy が築いたもの 教員・OBOG からの報告（80 分程度）

谷川建司（MAJESTy プログラムマネージャー）、中根圭一（読売新聞社）、家田有美子（講談社）、孟芊芊（リバネス）、中村理（早稲田大学大学院ジャーナリズムコース准教授）
（10 分間の休憩）

第 2 部 科学技術ジャーナリズム これまでの 10 年これからの 10 年（120 分程度）

4 人の登壇者によるショートスピーチとパネルディスカッション

■パネルディスカッション登壇者

田中幹人（たなかみきひと）早稲田大学政治経済学術院ジャーナリズムコース准教授

1972 年、静岡県浜松市生まれ。東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了。学術博士。早稲田大学政治学研究科「科学ジャーナリスト養成プログラム（MAJESTy）」助手などを経て、2010 年より現職。科学とメディアのあいだで起こる問題について、定量・定性的手法を用いて研究に取り組んでいる。

須田桃子（すだももこ）毎日新聞科学環境部記者

1975 年、千葉県生まれ。早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了（物理学専攻）。2001 年 4 月毎日新聞社入社。水戸支局を経て 2006 年から東京本社科学環境部記者。生殖補助医療や生命科学、ノーベル賞などを担当。STAP 細胞事件では、各関係者への独自取材をもとにスクープを連発。一連の報道をリードしつづけた。

横山広美（よこやまひろみ）東京大学大学院理学系研究科・理学部准教授

専門は現代科学論・科学コミュニケーション分野。2004 年 3 月東京理科大学大学院理工学研究科博士過程満期終了退学、2004 年 9 月東京理科大学大学院理工学研究科にて博士（理学）。在学中から科学を伝えることを志し執筆を行い、2004 年 10 月から専門を科学コミュニケーション分野にする。東京工業大学研究員、総合研究大学院大学上級研究員を経て、2007 年から現職（広報室副室長も兼務）。

上田俊英（うえだとしひで）朝日新聞編集委員

1960 年、愛媛県生まれ。東京大学理学部物理学科卒業。1985 年朝日新聞入社。東京本社科学部、アメリカ総局などを経て、東京本社科学医療部長として東日本大震災報道にあたる。国内の原子力事故をはじめ、東日本大震災など自然災害の取材にも数多く携わってきた。2014 年 1 月より現職。2014 年春、居住地を東京から福島に移して、福島総局を拠点に地元での取材活動にとりわけ力を入れている。